

『ヘンリー六世』三部作

—エリザベス時代の上昇志向とその波紋—

石橋 敬太郎

序

最近の『ヘンリー六世』三部作批評は、E. M. W. ティリヤード(E. M. W. Tillyard)が提唱した「テューダー神話」に異論を唱え、この劇が初演された当時のポリティックスをもとに作品を読み解いていく。中でも、アルマダ以後の女王の消極的な対外政策がもたらした政治的混乱を考慮に入れての議論が中心を占めつつある⁽¹⁾。確かに、弱体化した王権が招いた混乱は、搾取される平民の悲劇を含めて劇中に散在されており、その点については異論はないのだが、問題は王権を弱体化させた社会的変化が等閑視されていることにある。言い換えれば、この劇が初演された時代の社会的変化が、劇中に見られる混乱を引き起こしたのだと考えられるのである。

王権を弱体化させた社会的変化とは、共同体的な意識をもとに国家を統制しようとする社会から、個人の意志を規範とする社会への変化である。個人の意志を規範とする社会的な変化は、ヘンリー八世がローマ教皇と袂を分かち、結果、イングランドの教会と国家の首長となったことから展開した。もともと、イングランドには、教会上の主権を国王に認めるかどうか明白な見解がなかったため、国王にそれを認めない長老会派は、個人の意志をもとに教会改革を押し進めたのである⁽²⁾。とりわけ、長老会派は国教信奉を強制されたことにより、国王に対する「抵抗」の理念を生み出し、国王の教会上の主権を議論する場として個人の意志を重視する⁽³⁾。

その際に、個人の主体性をどのように解釈するかが国教会派と長老会派の議論の対象となった。国教信奉を支持するリチャード・フッカー(Richard Hooker)は、主体をコミュニティの一部として解釈し、個人の意志を制限する⁽⁴⁾。これに対して、教会改革を求める長老会派のトマス・カートライト(Thomas Cartwright)は、主体を自律的な存在として解釈し、個人の

意思を尊重する。彼は、個人の財産、プライバシー、良心から個人の自律を説き、政治的な権力の拡大をもくろむウィリアム・セシル(William Cecil)やエセックス伯(Earl of Essex)といった強大な平信徒から絶大な支持を得ることになる⁽⁵⁾。

もちろん、長老会派の主張は、これまでのビショップ制度を批判すると同時に、その長たる教会上の王の権威をも無視することになる。そのため、国教会派のジョン・ホイットギフト(John Whitgift)は、1583年にカンタベリー大司教に任命され、長老会派を徹底的に攻撃する。ホイットギフトは、牧師全員に一般祈祷書や39箇条に同意することを要求し、これに同意しなかった者には、罰として逮捕や聖職禄の剥奪、王権蔑視罪などを適応したのである⁽⁶⁾。そして、1590年にカートライトがフリート監獄に投獄されたことを契機に、長老会派の教会改革は、破綻を迎えることになる⁽⁷⁾。

しかし、これまでとは異なり、個人の意志が重視されたことから、この時代に大きな変化が現れることになる。すなわち、時代は封建的な主従関係を土台とした社会から、「個人主義」社会へと変化し⁽⁸⁾、自らの力で社会の頂点にのし上がろうとする傾向が現れたのである(以下、これを上昇志向と呼ぶ)。そして、この傾向は社会のあらゆる階層に浸透し、多くの点で「競争」が現れてきた。各階層の人々は、自らを前面に押し出さなければ、押しのけられる時代となったのである⁽⁹⁾。

このような上昇志向は、ある意味で不安な時代を作り出すことになる。例えば、土地所有者やヨーマンは、貧しい者を犠牲にして半ば資本主義的な経済システムを発展させ、財産を築いたジェントリーは、それをもとに成り上がり、従来のハイエラルキカルな社会構造を根底からくつがえすこととなった⁽¹⁰⁾。そのような社会構造の変化に伴う社会的な危機は、『ヘンリー六世』三部作にも映し出されていると考えられるのである。

劇中のヘンリー五世の時代は、騎士道精神と法が国家を統制してきた。ところが、ヘンリー五世の死を契機に、それは個人の意志をもとに自らの利益を追求する精神に取って代わられる。その際に、ウインチェスター、ヨーク、サマセットたちは、かつてからの規範を徹底的に破壊し、国家を

混乱させる。また、上昇機会にめぐまれず、社会から押しつけられた貧しい者は、さらに貧困にあえぐようになり、その不満はジャック・ケイドの反乱で具体化される。以下においては、『ヘンリー六世』三部作は、個人の意志を規範とし、社会的な地位を獲得しようとする上昇志向が国家にどのような影響を与えるかを、社会の各階層に焦点を当てながら、シェイクスピアが描いて見せた劇であることを論じてみたい。

I

シェイクスピアの視線は、まず宮廷に向けられる。冒頭の場面では、ヘンリー五世の死をめぐって貴族たちが争い、彼らの争いの最中、メッセンジャーは、彼らにフランスとの戦いについて悪い知らせを伝える。そうした場面は、1588年のアルマダとの戦いまでに見られた英雄的な軍人貴族が支配する共同体的社会から、教育を受けた宮廷人が支配する個人主義的社会への変化を映し出している。事実、1589年秋以降のフランスでの不毛な戦いは、宮廷内の派閥争いによって引き起こされた。宮廷内で政治の実権を確かなものにしようとしていたセシルを中心とする高官は、援軍を求めるエセックス伯の要求を退け、フランスでの戦いを不利なものとした⁽¹¹⁾。劇中のメッセンジャーの次の言葉は、そのことを端的に表している。

Amongst the soldiers this is muttered—
That here you maintain several factions:
And whilst a field should be dispatch'd and fought,
You are disputing of your generals;

(*I Henry VI*. i. 70-73)⁽¹²⁾

メッセンジャーの言葉には、共同体的意識をもとに国家を統制しようとするかつてからの規範は見当たらない。代わりに、党派争いが繰り広げられ、故国の苦境を顧みることのない1590年前後のイングランドの宮廷の様子を伝えてくれる。これに呼応して、後に続く場面では、個人の意志をもとに他人を押しつけてまで政治的な地位を獲得しようとする上昇志向

が現れてくる。王の叔父で摂政のグロスター公ハンフリーがフランスでの戦いの準備をして、国家の安定のために尽力しているとき、政治的権力を失いつつある、王の大叔父で枢機卿のウィンチェスターは「今にエルサムから王を盗み出して、政治の面舵を握ってやる」（一幕一場176-77行）と言って、グロスター公に敵意をあらわにし、政治の実権を回復しようともくろむのである。

また、ヨークは、失われた公爵領の回復を望み、政治の中心にもぐりこもうとするのだが、サマセットはそれを許さない。ヨークとサマセットの闘争は、政治的な地位を獲得しようとする上昇志向の産物だと言える。彼らの闘争は、エリザベス女王が権力を一身に集めるために、自らの意にかなう廷臣を要職に登用した政策の結果を映し出していると言ってもいい。本来、古い貴族政治を解体し、新しい政治体制を築くはずだった女王の政策は、宮廷内で指導的な地位を得ようとする廷臣たちの激しい権力闘争に取って代わったのである⁽¹³⁾。彼らは、国家の利益には全く関心がなく、自らの地位を獲得するためには法をも恐れなかった⁽¹⁴⁾。

劇中でも同じことが示される。テンプル法学院の場で、サフォークは「事実、私は法律学の怠け者でした。どうしてもそれを好きになれなかったのです。だから、まず法律を好きになるように仕向けてください」（二幕四場7-9行）と言う。この場面は、ホリンシェットの『年代記』にはなく、シェイクスピアが創り出したものである。そのことは、この劇が初演された時代の社会的な変化の影響を、シェイクスピアが端的に言い表していると言える。

さらに劇中では、ウィンチェスターは、グロスター公が慎重に考えて王に用意した書類を引ったくり、それを引き裂いてしまう。彼の行為は、合法的な裁判手続の侮蔑にほかならない。そして、彼らは、自らの利益を求めて無意味な権力闘争を続けるのである。もっとも、国王ヘンリーは、平和を希求し、一度は王権をもって貴族間の争いを和解させるものの、彼の政策は憎しみの固まりと化している貴族たちには通じない。彼は、貴族が敵対する根源的な理由を見抜けないことによって、グロスター対ウィンチェスター、ヨーク対サマセットの争いを浮き彫りにし、ばら戦争の直接の

原因となる。

一見、ヘンリーは、自らの弱さと王としての威厳との間でアイロニックな矛盾を露呈しているように思われるが、問題は貴族たちが王の権威を無視していることにあるのではなかろうか。個人の意志を軸として、政治的な地位を獲得しようとする上昇志向は、王の権威をも物ともしないのである。その結果、王権を頂点として国家を統制しようとするトールボットの共同体的意識は、ヨークやサマセットから援軍を拒まれ、最終的にラ・プーセルを中心とするフランス軍に打ち負かされることで崩壊してしまうのだ。

II

共同体的意識が崩壊したことにより、個人の意志が国家を統制する規範となる。法を軽視するサフォークは、国家を操りたいという政治的な野心のみから、レニエの娘マーガレットを王妃に迎えることを画策する。彼は「マーガレットが王妃になれば、王を支配することになるだろう。だが、彼女と王、そしてこの王国を支配するのはこの俺だ」（五幕五場107-8行）と言ってはばからない。

もちろん、個人が自律し、個人の意志を国家を統制する規範とした要因は教育であった。社会的な地位を得る上で教育は、従来の騎士道精神に取って代わり、封建的な貴族を頂点とする社会構造も一変する。かつてからの軍人貴族や中流階級の人々は、社会的な地位を得るためにその子弟を大学や法学院に入れた。それにより、さらに他人を犠牲にしてまで上昇しようとする気運が激化してくる。こうした気運は、道徳的な価値を低下させるとともに、社会的な不安を生み出す元凶となった⁽¹⁵⁾。常に争いが生じ、宮廷は共謀や反目の場と化したのである⁽¹⁶⁾。

第二部開幕早々、ウィンチェスターを中心とするサマセット、サフォーク、バッキンガムがグロスターを転落させるために党派を結成したことは、そのことを能弁に物語っている。むろん、グロスターは、法を国家統制の規範とする有能な政治家であり、政治的腐敗を一掃できる唯一の人物であ

る。それにもかかわらず、彼らが彼に敵意を示す理由は、ソールズベリーが「あの連中は、おのれの出世のためにのみはたらいっている」（一幕一場180行）と述べたように、政治的な地位を獲得するためだけなのだ。

こうした上昇志向が内包する危険性は、宮廷内で政治の実権を握ろうとする男性の貴族ばかりに見られるのではない。それは、グロスター公の妻エリノアにも見られる。彼女は、王妃マーガレットに対する敵意から王妃になることを望む。

What seest thou there? King Henry's diadem,
Enchas'd with all the honours of the world?
If so, gaze on, and grovel on thy face,
Until thy head be circled with the same.
Put forth thy hand, reach at the glorious gold.

(2 Henry VI. ii. 7-11)

エリノアの敵意は、とりもなおさず、マーガレットの貧しい生まれにある。この劇が初演された時代の半ば資本主義的な経済システムの進展により、財産を提供することが女王に忠誠を示す流儀となり、貧しい貴族は、政治の中心から追い出されることになった⁽¹⁷⁾。シェイクスピアは、もともと貧しい生まれであるはずのマーガレットが裕福になり、エリノアに敵意を示させることで、この時代の社会的変化によって地位を揺さぶられた者の怒りを表すのである。

III

シェイクスピアの視線は、社会全般に浸透してきた上昇的な機会を捉え、政治的な地位を獲得しようと抗争を繰り広げる貴族のみならず、彼らの抗争の結果、ますます社会の底辺に追いやられる貧しい平民にも向けられる。劇中で、親方の反逆を訴えるピーターの言葉の取り違えは、教育を受けられない者の現状を映し出している。さらに、貧しさゆえにシムコックスが虚言を吐いたことは、教育によって社会的な地位を獲得しようとする上昇志向に乗じることができなかつた者の不満を言い表している。このような

上昇志向から押しつけられた人々の不満は、囲い込みによって生じた苦境を訴える請願者にも現れる。

本来、土地は、生計のために存在していたのだが、社会的な地位を獲得しようとする上昇志向とあいまって商業的な利益を生み出す場となり、急速に囲い込まれ物価の高騰を招く原因となった。それにより、貧民はさらに貧困にあえぐようになる⁽¹⁸⁾。1588年、フィリップ・スタップズ(Philip Stubbs)は「こうした囲い込みは、動物が芝草を食べるように、金持ちが貧民を食いつくす理由となった」と述べている⁽¹⁹⁾。折しも、劇中のサフォーク伯は、請願者の一人から「囲い込み」のために非難される。

What's here! [*Reads.*] "Against the Duke of
Suffolk, for enclosing the commons of Long Mel-
ford." How now, sir knave!

(2 *Henry VI. I. iii. 20-22*)

さらに、貧しい者の不満は、ジャック・ケイドの反乱でクローズ・アップされる。もともと、ケイドの反乱は、ヨークの政治的な目的によって引き起こされたのだが、それを単なる喜劇的な場面として見過ごすわけにはいかない。彼の反乱には、貧民を生み出した各階層の上昇志向に対する非難が込められているのである。ケイドを首謀とする暴徒の非難の対象は、そうした上昇志向を生み出した「読み書き能力」と文化的なたしなみである。従って、裁判官のセイ卿は、教育と知識で天国に飛べると言っても、無学な暴徒には全く通じない。

プロテスタントの聖書中心主義は、国民の「読み書き能力」を高めたが、その能力は、ジェントリーなどの中流階級にしか社会的な地位を捉える機会を与えなかった⁽²⁰⁾。平民の一人ホランドは「ジェントルマンが台頭して以来、イングランドには陽気な世界はなかった」(四幕二場8-9行)と言っていた。その意味でも、「王国中を平等にする」(同65行)とか「これから先、金は必要ない」(同69-70行)というケイドの主張は、単なるユートピア的な理想ではなく、搾取される者の声を代弁しているのである。

この反乱で、暴徒は、まず上昇志向に乗じ成功を収めた代表格である法

律家を殺害する。暴徒が法律家を攻撃したことは、この時代、裁判官は買収され、無学な平民はその犠牲者となったことから察せられる⁽²¹⁾。それ故、チャタム執事が我々の目の前で引きずられたり、セイ卿と義理の息子の切断された頭をケイドが口づけさせることは、1590年代前後の上昇志向から押しつけられた者の不満を十分に表していると言えるのである。そして、スタッフォード兄弟に武器を捨てるように要求されたとき、ケイドは、大胆にも「自由」を求めて彼らの要求を拒み、平民を戦場へ導くのである。

And you that love the commons, follow me.

Now show yourselves men; 'tis for liberty.

We will not leave one lord, one gentleman:

Spare none but such as go in clouted shoon,

For they are thrifty honest men, . . .

(2 *Henry VI*. IV. ii. 175-79)

しかしながら、最終的に、無学で貧しい者を支援するケイドの反乱は、燃えさかるロンドンの通りでの彼の心ない破壊や、ビールや処女を際限なく享受したいという欲望によって台無しにされる。だが、彼の欲望は、搾取する階級への嫌悪感を十分に伝えてくれる。事実、この劇が初演された数年後の1596年に農民による暴動が生じたことは、この時代の上昇志向から押しつけられた貧しい者の不満が爆発寸前であったことを描いているのだ⁽²²⁾。

IV

シェイクスピアの視線は、もう一度、宮廷に向けられる。グロスター公ハンフリーの死後、『ヘンリー六世』第三部では、全く政治的根拠のない権力闘争が示される。その闘争の中で、ヘンリーは、救いようのない政治的妥協から息子の相続権を奪う。ヘンリーの行為は、個人の意志を規範として、政治的な地位を獲得しようとする宮廷人の上昇志向によって促されたとも言え換えられる。それ故、こうした上昇志向とは相入るはずのな

い「美德」「慈悲」「公正」から国家の安定を希求するヘンリーの政策は、全く聞き入れられない。後に続く場面で、ヨークとマーガレットは、ヘンリーの言葉を無視して自らの意志を満足させるために戦いを繰り返し、その戦いは熾烈を極めることになるのである。

ウェイクフィールドの戦いでクリフォードは、父の復讐のためにヨークの幼い息子ラットランドを殺害し、マーガレットは、ヨークを捕らえて紙の王冠をかぶせてなぶりものにする。そして、上昇志向がもたらした党派争いは、父と子が知らずして互いに殺し合うという悲惨な場面にまで展開するのである。その争いの中で、ヘンリーは、ヨーク派とランカスター派のいずれにも味方せず、自らが不適切に悪を扱い、結果として生じた破滅と荒廃に苦悩する。彼の苦悩は、個人の意志を規範とした上昇志向の前では、王権が全く無力であることの苦悩だと言っても過言ではない。

また、この時代の上昇志向に対する抵抗は、新たに玉座に就いたエドワード四世が身分の低いエリザベス・グレイと結婚した場面にも現れる。彼は、フランス王の妹ボーナ姫と結婚するはずであった。エドワードの弟たちが彼の結婚を侮蔑したことは、この時代の上昇志向に対する抵抗と言ってもいい。事実、教育を受けた中流階級出身者が官職に登用され、これまでのハイエラルキカルな社会構造が崩壊しつつあった時代、エドワードの弟たちのようなかつてからの貴族は、身分の低い者との結婚により、階級差が曖昧にされることに異論を唱えていたのである⁽²³⁾。クラレンスは、エドワードの結婚について次のように述べて、ウォリックとともに彼のものを離れる。

In choosing for yourself you show'd your judgment,

Which being shallow, you shall give me leave

To play the broker in mine own behalf;

And to that end I shortly mind to leave you.

(3 Henry VI. IV. i. 60-63).

先に王に忠誠を誓っておきながら、それが容易に破られることは、事態の決定に個人の意志が大きな位置を占めていたことにほかならない。それは、教会改革の際、王に対する抵抗が認められたことの証拠であるとも言

い換えられる。教会改革がもたらした個人の意志の重視は、王権をも揺るがすのだ。実際、エリザベス女王も、上昇志向から指導的な地位を獲得しようとする宮廷内の派閥争いを抑えることができず、議会から批判を浴びた⁽²⁴⁾。

劇中では、血生臭い抗争が繰り広げられ、最終的に、バーネットの戦いとテュークスベリの戦いで、ヨーク側が勝利を取める。これらの勝利の後、ヘンリーは殺害され、ヨーク公エドワードが政権を握ることになる。終幕でエドワードは、これから先の平和な世界を予言するが、後の『リチャード三世』ではその平和な世界も粉々にされる。真の平和な世界は、貴族間の争いを抑え、議会を中心とした政治から、前例のない政治的平衡の時代を築くことになるヘンリー七世の治世まで待たなければならない。その意味からすると、ヘンリーの王としての弱さが、国家に混乱を引き起こしたばかりではなく、教会改革がもたらした個人の意志の重視が、社会のそれぞれの側面で破綻を生み出すことを、シェイクスピアは劇中で描いて見せたと言えるのである。

註

(1) Leah S. Marcus, *Puzzling Shakespeare : Local Reading and Its Discontents* (California : University of California Press, 1988), pp. 51-96. なお、三部作の執筆順を第一部、第二部、第三部の順と考えるか、第二部、第三部、第一部の順に考えるかは意見の分かれるところである。小論では、三部作に一貫して流れている主題を考慮して、前者の考えにしたがった。

(2) Donna B. Hamilton, *Shakespeare and the Politics of Protestant England* (New York : Harvester Wheatsheaf, 1992), p. 5.

(3) Hamilton, p. 5.

(4) Hamilton, p. 5.

(5) Hamilton, p. 6.

(6) S. T. Bindoff, *Tudor England* (Harmondsworth : Penguin Books Ltd., 1975), pp. 241-42.

- (7) Bindoff, p. 243.
- (8) Victor Kiernan, *Shakespeare : Poet and Citizen* (London : Verso, 1993), pp. 4-5.
- (9) Kiernan, pp. 4-5.
- (10) Richard Helgerson, *Forms of Nationhood : The Elizabethan Writing of England* (Chicago and London : The University of Chicago Press, 1992), pp. 126-27.
- (11) Donald G. Watson, *Shakespeare's Early History Plays : Politics at Play on the Elizabethan Stage* (London : MacMillan, 1990), pp. 39-40.
- (12) 本文のシェイクスピアからの引用は、拙訳を含めて、The Arden Shakespeare 版に拠る。テキストとしては *The First Part of King Henry VI*, ed. Andrew S. Cairncross (London : Methuen, 1981); *The Second Part of King Henry VI*, ed. Andrew S. Cairncross (London : Methuen, 1984); *The Third Part of King Henry VI*, ed. Andrew S. Cairncross (London: Methuen, 1982)を使用した。
- (13) John D. Cox, *Shakespeare and the Dramaturgy of Power* (Princeton : Princeton University Press, 1989), p. 87.
- (14) J. B. Black, *The Reign of Elizabeth : 1558-1603* (Oxford : Clarendon Press, 1987), p. 261.
- (15) Kiernan, pp. 4-5.
- (16) Kiernan, p. 6.
- (17) E. K. Chambers, "The Court," in *Shakespeare's England : An Account of the Life & Manners of his Age*, Vol. I (Oxford : Clarendon Press, 1916), pp. 100-1.
- (18) Black, pp. 251-52.
- (19) Black, p. 252.
- (20) Kiernan, p. 43.
- (21) Black, p. 261.
- (22) Black, p. 253.
- (23) Cox, p. 86.
- (24) Black, pp. 207-8.